

## 夕暮

## カベル橋（ルツェルン）

古い木造の橋には屋根がついていた  
その下の梁には薄汚れた絵が何十枚も架かっていた  
まるでおどけた亡霊のように、そして  
あたかも時の流れをあざ笑うかのように  
僕は不思議にそれらに親しみを覚えてかすかに笑う

澄んだ水の上には夕日の中に沐浴し  
黒いシルエットの輪郭をオレンジ色にきらめかせ

みなも  
水面を見つめている水鳥たちがゆっくり滑る

少し下に架かる橋を渡る人々がすれ違うのを眺めるとき  
僕はふれあいというものの肌触りを感じる

淡い光は、昼のそれよりも豊かに思え  
橋の床がきしむ音は僕を静寂というヴェールに包み込み  
全てがやはらかに寄り添い合う水辺に  
苛立ちが、怖れが、鋭い感情の波形が  
角を丸められてかすんでゆく夕べなのです

(1984.4.26)